

## 施無畏印の起源に関する一考察

山本明仁

仏教彫刻の特徴の一つに仏像がその意思を表すときに持物ではなく身振りでその意思を表現するというものがあり、これは印相と呼ばれている。その中でも右手の掌を胸の前に掲げる仕草は施無畏印と呼ばれ仏陀の取る最も典型的な印相の一つとして仏像誕生直後からよく用いられる印相であった。

このような仕草が仏陀の取る仕草の主要なものの一つになったからには、この右手を掲げる仕草が当時何らかの重要な意味を持っていたと考えられる。

西アジアに目をむけてみると、パルティアやアケメネス朝でも同様の右手を掲げる仕草が多く見られる。このことは仏像の成立過程から言っても仏陀の施無畏印に何らかの影響を及ぼしたと推測できる。また西アジアを眺める際にさらに古代オリエントにも目を向けてみると、同様に古代オリエントにおいても右手を掲げる仕草があることがわかる。さらに、古代オリエントにおける右手を掲げる仕草はアケメネス朝においてアフラマズダーが乗り王権神授を行っていた有翼円盤と共に多くあらわされている。これらのことから施無畏印の起源は西アジアさらには古代オリエントにおける有翼円盤に付随す

る右手を掲げる図像からきているのではないかと考え考察した。

その結果古代オリエントにおける右手を掲げる図像には、ハトホルを初め豊饒をつかさどるとされる女神達が付随し、さらに右手を掲げる仕草は保護を表すことが分かった。そして図像では王がその女神に自身の王権の保護をもとめているのである。これはアケメネス朝における王権神授の観念に通じるものであり、図像の構成はもとより意味においてもアケメネス朝が古代オリエントにおける右手を掲げる図像を踏襲していたことが分かる。

さらにアケメネス朝における王権神授の観念からくる王権の保護とそれに対する制約という右手の持つ意味はパルティアにおいてミトラ信仰と結びつき、死者に対する来世への保証という意味が付加された。

その結果クシャーン族が西アジアの文化を媒介し仏像が作られる際に、燃燈仏が釈迦に來世仏陀になるという予言を与える授記の意味が、パルティアにおいて右手を掲げる仕草が持つ死者に対しての來世への保証という意味と結びつき施無畏印が誕生したと考えるのである。